

孤独感と対人的信頼感

—— 高校生と大学生との比較を中心として ——

LONELINESS AND INTERPERSONAL TRUST IN
HIGH-SCHOOL AND UNIVERSITY STUDENTS

諸 井 克 英

Katsuhide Moroi

問 題

Peplau ら UCLA の研究グループによれば、孤独感は、“個人の社会的関係のネットワークが願望よりも小さかったり不満足なものであるときに”(Peplau & Perlman, 1979), 生起する。この定義は、孤独感の重要な規定因が当該個人の社会的ネットワークの状態であることを意味している。

ところで、社会的ネットワークの形成やそれに対する満足感は、その個人を取り巻く対人的環境の中で生じる。この対人的環境についての態度や信念が孤独感に関わりをもたないであろうか。

Jones *et al.* (1981) は、大学生を調査対象として、対人的環境に対する態度や信念と孤独感との関係について、次の知見を得た。高孤独者には、a) この世界が秩序ある公正な場所、すなわち正当世界であるとはあまり信じない(正当世界尺度, Rubin & Paplau, 1973), b) 他者を受容せず、自分が他者を受容されているとも思わない(他者受容インベトリー, Fey, 1955), c) 自己の行動と強化の生起との随伴性や、強化の統制可能性をあまり信じない(統制の所在尺度, Rotter, 1966, ——ただし男子のみ), d) 他者に信頼ある行動を期待しない(人性観尺度, Wrightsman, 1964, ——ただし女子のみ), という特徴があった。このように、自己の対人的環境についてネガティブな態度や信念を形成している個人は孤独感を生じ易いと予測される。

本研究では、対人的環境についての態度や信念の方向性の指標としてRotter (1967) の対人的信頼感を取りあげる。彼によれば、対人的信頼感とは他者あるいは集団の言質が信頼できるという一般化された期待であり、その期待は過

去の強化生起経験により形成される。したがって、このような一般化された不信感¹は孤独感を招き易いと予測される。

Rotter の对人的信頼感²は 对人的環境全体についての一般的期待であるが、自己の社会的ネットワーク内で個別的对象について抱いている信頼感も考慮すべきであろう。つまり、家族や親友に対する満足度と孤独感との関係についての知見 (Cutrona, 1982 ; 工藤・西川, 1983) を踏まえれば、社会的ネットワーク内のそれぞれの対象に対する信頼感も孤独感の重要な規定因かもしれない。したがって、家族 (父親, 母親, きょうだい), 同性親友, 異性親友, および教師・教官 (後述するように被験者が高校生および大学生であることを考慮して), それぞれに対する個別的信頼感と孤独感との関係についても検討する必要がある。本研究では、さらに、それぞれの対象についての満足度も測定することによって、各対象から得る満足度と各対象に対する信頼感との孤独感に対する相対的規定度を検討する。

また、孤独感の規定因を発達の観点から検討するために、本研究では、青年期中期に入りつつある高校1年生と青年期後期に入りつつある大学1年生とを被験者に用いた。

方 法

調査対象および調査の実施

国立大学および私立大学 (以下、それぞれA大学, B大学と略す) の教養部で、“心理学講義”を受講している1年生 (A大学: 男子163名, 女子34名; B大学: 男子60名), および県立普通高校1年生2クラス (男子55名, 女子39名——以下, C高校と略す) を調査対象とした。なお, A大学およびC高校は名古屋市内にあり, B大学は名古屋市近郊にある。

調査は、“大学および高校新入生の生活事態変化に伴う孤独感”に関する調査 (諸井, 1986, 参照) を利用し, 記名方式で行った。調査時期は大学および高校ともに1984年7月上旬である。なお, 不適切な回答のために測度ごとに有効ケース数は異なる。

質問紙の構成

“大学および高校新入生の生活事態変化に伴う孤独感”に関する調査の中で本研究に係る質問項目は次の通りである。

① 孤独感尺度：Russell *et al.* (1980)による UCLA 孤独感尺度（改訂版）を用い、20項目のそれぞれについて日ごろ自分が感じている程度を“たびたび感じる”から“けっして感じない”の4点尺度で評定させた。得点は孤独感が強いほど高得点になるようにした（1点から4点）。

② 対人的信頼感尺度：Rotter (1967)によって作成された対人的信頼感尺度（25項目）を邦訳し、それぞれの項目が自分自身の行動や気持ちにどのくらいあてはまるかを、“かなりあてはまる”から“ほとんどあてはまらない”の4点尺度で評定させた。得点は対人的信頼感が強いほど高得点になるようにした（1点から4点）。

なお、孤独感尺度および対人的信頼感尺度では項目の配列順の効果がないことを確認するために、項目順が異なる4タイプの質問紙をそれぞれ用いた。

③ 個別的信頼感：父親、母親、きょうだい、同性親友、異性親友、および教師・教官に対する信頼感についてそれぞれ4点尺度で評定させた（“かなり信頼できる”4点～“ほとんど信頼できない”1点）。

④ 個別的満足度：父親、母親、およびきょうだいに対する満足度について4点尺度で評定させた（“かなり満足”4点～“かなり不満足”1点）。

同性親友および異性親友については、大学内と大学外に分けて同様に評定させたが、本研究では、次のように満足度を算出した。大学内・外ともに親友が存在するときには2つの評定の平均値、大学内にのみ親友が存在するときには大学内の評定値、大学外にのみ親友が存在するときには大学外の評定値を、満足度とした。また、大学内・外ともに親友がいなくときには欠損値として処理した。

結 果

孤独感尺度および対人的信頼感尺度の検討

2尺度の検討は、まず大学生および高校生をあわせた351名を対象として行った。

① 孤独感尺度：尺度を構成する20項目それぞれの弁別力については、GP分析（上位群91名、下位群93名； $t=7.24\sim 15.01$ ， $df=105.82\sim 182$ ，すべて $p<.001$ ）および項目相関分析（当該項目と当該項目を除く総得点との相関： $r=.313\sim .648$ ，すべて $p<.001$ ）からいずれも高いと判断できた。 α 係数は.885であり尺度全体の内的整合性も高いといえる。したがって、20項目の合計得点

を孤独感尺度得点とすることは妥当であると結論できる。

また、得点分布は正規型であり (Kolmogorov-Smirnov の検定, $z=0.852$, $p=.462$), 項目順の異なる 4 タイプ間には得点差は認められなかった $F(3,347)=1.70$, $n.s.$).

② 対人的信頼感尺度: Kaplan (1973) および Chun & Campbell (1974) は因子分析により対人的信頼感尺度が複数の因子次元から構成されることを指摘している。しかし, a) 両研究でそれぞれ得られた次元に食い違いがみられる, b) 本研究でも因子分析を試みたが, 説明率が低いうえに, 得られた因子次元のサンプルによる差が大きい, という理由から, 本研究では対人的信頼感尺度を一次的に取り扱うことにした。

まず 25 項目について GP 分析を行ったところ, 2 項目の弁別力がないと判断されたので, その 2 項目を除外した。

次に残り 23 項目について同様の分析を行った。その結果を Table 1 に示す。

Table 1
対人的信頼感尺度項目と項目分析 (2 回目) の結果 $N=351$

(+) : 正方向項目 (-) : 負方向項目	平均値 (SD)	当該項目を 除く総和得 点とのピア ソン相関(a)	GP 分析(b)(c)(d) 上位群 (86名) 下位群 (85名)
1. たいていのセールスマンは, 自分が 売ろうとする製品の良い点と悪い点を 正直に言う。	(+) 1.54 (0.60)	.306	$t=8.71$ $df=134.14$
2. 大多数の学生は, カンニングをして 見つからないことがわかっている場合 でも, カンニングはしない。	(+) 2.50 (0.86)	.327	$t=7.57$ $df=169$
3. 私たちの社会では, みせかけの善意 や善行がふえている。	(-) 2.07 (0.71)	.340	$t=7.13$ $df=169$
4. もっとすぐれた人物に政治をまかせ ないと, わが国の将来は暗いものにな る。	(-) 2.04 (0.82)	.321	$t=9.53$ $df=169$
5. 親は, たいてい, 約束したことは必 ず守る。	(+) 2.87 (0.70)
6. 法廷は, だれもが公正な扱いを受け ることのできる場所である。	(+) 2.84 (0.80)	.352	$t=6.87$ $df=154.16$
7. 試験のときに監督者がいなければ, おそらく, カンニングがふえるだろう。	(-) 2.00 (0.89)	.306	$t=8.45$ $df=169$
8. 国際連合は, 世界平和を守る有効な 力には決してならないだろう。	(-) 2.51 (0.77)	.260	$t=5.42$ $df=157.02$
9. 自分たちが見たり聞いたりしているニ ュースがどんなにゆがめられたものであ るかを知らず, みんな不快に思うだろう。	(-) 1.62 (0.66)	.280	$t=6.35$ $df=164.37$

Tabel 1 のつづき

10. 親は、罰すると言ったことは、必ず罰する。	(+)	2.61 (0.68)
11. たいていの修理屋は、客が修理の内容について無知であっても、不当に高い代金を請求することはない。	(+)	2.68 (0.75)	.250	$t=5.76$ $df=158.09$
12. 新聞、ラジオ、テレビなどの報道では、世の中の出来事の正確な説明は行われていない。	(-)	2.35 (0.72)	.253	$t=5.87$ $df=169$
13. 世の中は、この先、バラ色である。	(+)	1.88 (0.66)	.337	$t=7.09$ $df=169$
14. ほとんどの政治家は、選挙のときに約束したことを忠実に実行する。	(+)	1.50 (0.63)	.342	$t=8.16$ $df=118.90$
15. 専門家というものは、自分が知らないことはすなおに知らないと認めるものである。	(+)	2.23 (0.91)	.299	$t=6.79$ $df=169$
16. 保険会社に対する事故賠償請求の内容の大部分はいんちきなものである。	(-)	2.60 (0.67)	.288	$t=7.61$ $df=152.88$
17. ほとんどのスポーツ競技大会は、はじめから、だれが勝つかは決まっている。	(-)	3.26 (0.75)	.194	$t=4.75$ $df=147.49$
18. 競争時代の現代では、だれかが自分を利用しようとしているので、ゆだんしてはいけない。	(-)	2.40 (0.73)	.280	$t=6.10$ $df=169$
19. 理想主義者は、誠実で、自分の主張をたいてい実行する。	(+)	2.19 (0.76)	.159	$t=4.10$ $df=169$
20. 国際政治の舞台裏で行われていることを知ったら、だれもが今以上に驚くのはもっともなことである。	(-)	1.62 (0.70)	.197	$t=5.86$ $df=169$
21. 大多数の人々は、世論調査には正直に回答している。	(+)	2.79 (0.71)	.315	$t=5.52$ $df=152.75$
22. たいていの人には、口先ではうまいことを言っても、結局は自分の幸せにのみ関心があるものである。	(-)	1.85 (0.67)	.376	$t=8.35$ $df=169$
23. たいていの人には、自分がすと言ったことは、まちがいに実行する。	(+)	2.15 (0.64)	.371	$t=7.37$ $df=169$
24. 初対面の人には、その人が信頼できることがはっきりとするまでは、用心深くしたほうがよい。	(-)	2.09 (0.73)	.255	$t=5.95$ $df=169$
25. ほとんどの人々が法律を破らないのは、良心のためというよりも社会的な非難や罰を受けるのがこわいからである。	(-)	2.04 (0.83)	.378	$t=7.91$ $df=169$

(a)項目19: $p < .01$; 項目19以外: $p < .001$

(b)分散が同質でないとき認められたときには、Welch の法を用いた。

(c)得点範囲: 上位群56-70点, 下位群30-46点

(d)すべて, $p < .001$

23項目すべてで各項目が弁別力を持つと判断された。さらに、23項目全体での

尺度の内的整合性をみると、 α 係数が.750と十分な大きさであったので23項目の合計得点を対人的信頼感尺度得点とした。得点分布は、正規型であった(Kolmogorov-Smirnovの検定、 $z=1.14$, $p=.147$)。

なお、項目順の異なる4タイプ間で得点が異なる傾向性があった($F_{(3,347)}=2.50$, $p<.10$)。これは、後の分析で述べるように対人的信頼感の高いA大学一女子で、4タイプの質問紙の配付に偏りが生じたためであった(つまり、A大学一女子でタイプIの配付数が少数であったため、全体としてのタイプIの合計得点が低くなっている)。

③ 2尺度のサンプル別 α 係数： Table 2には2尺度のサンプル別 α 係数を示す。

Table 2
UCLA 孤独感および対人的信頼感尺度の α 係数

	N	UCLA孤独感尺度	対人的信頼感尺度
A大学一男子	163	.889	.759
一女子	34	.846	.715
B大学一男子	60	.893	.727
C高校一男子	55	.878	.769
一女子	39	.888	.673

孤独感尺度ではどのサンプルについても α 係数は十分な大きさであった。

対人的信頼感尺度については、A大学、C高校ともに、男子のほうが女子よりも α 係数が大きいという共通した傾向がうかがわれた。これは対人的信頼感の形成についての性差の存在を示唆するといえよう。

孤独感、対人的信頼感、個別的信頼感、および個別的満足度についてのサンプル間の平均値比較

各測度でのサンプルの平均値および分散分析の結果を Table 3 および Table 4 に示す。

- ① 孤独感： 女子サンプルでは男子サンプルに比べて孤独感が低い傾向がうかがわれるが、有意ではなかった。
- ② 対人的信頼感： 女子サンプルでは男子サンプルに比べて対人的信頼感が有意に高い傾向が認められた。
- ③ 個別的信頼感： 同性親友、異性親友、および教師・教官について有意

な傾向および傾向性が得られた。それぞれ、A大学2サンプルでは他のサンプルに比べて信頼感が高かった。

④ 個別的満足度：異性親友でのみ有意な傾向があった。ここでもA大学2サンプルでは他のサンプルに比べて満足度が高かった。

Table 3

孤独感，对人的信頼感，および個別的信頼感の平均値

	A大学 ↑ 男子	A大学 ↑ 女子	B大学 ↑ 男子	C高校 ↑ 男子	C高校 ↑ 女子	分散分析の 結果
孤独感	40.96 (8.16) N=163	38.76 (6.94) N=34	40.33 (8.91) N=60	40.69 (8.84) N=55	37.23 (7.94) N=39	$F=1.91$ $df=4/346$ <i>n.s.</i>
对人的信頼感	49.85 a (6.54) N=163	53.68 b (5.67) N=34	49.47 a (6.69) N=60	51.44 ab (7.54) N=55	53.00 b (5.71) N=39	$F=4.31$ $df=4/346$ $p<.01$
同性親友	3.56 bc (0.50) N=153	3.68 c (0.47) N=34	3.47 abc (0.54) N=59	3.36 a (0.56) N=55	3.44 ab (0.50) N=39	$F=2.68$ $df=4/335$ $p<.05$
個 異性親友	3.47 c (0.64) N=79	3.50 bc (0.52) N=14	3.24 abc (0.83) N=33	3.00 a (0.59) N=30	3.07 ab (0.59) N=15	$F=3.69$ $df=4/166$ $p<.01$
別 父 親	3.32 (0.70) N=154	3.33 (0.69) N=33	3.33 (0.73) N=58	3.23 (0.81) N=52	3.26 (0.82) N=39	$F=0.21$ $df=4/331$ <i>n.s.</i>
的 母 親	3.33 (0.64) N=162	3.47 (0.66) N=34	3.31 (0.59) N=59	3.35 (0.64) N=55	3.44 (0.68) N=39	$F=0.57$ $df=4/344$ <i>n.s.</i>
信 き よ う	3.11 (0.70) N=156	3.14 (0.88) N=29	2.96 (0.89) N=56	3.09 (0.74) N=53	3.09 (0.79) N=34	$F=0.42$ $df=4/323$ <i>n.s.</i>
感 教 師・ 教 官	2.72 (0.72) N=163	2.94 (0.69) N=34	2.59 (0.67) N=59	2.55 (0.79) N=55	2.74 (0.72) N=39	$F=1.95$ $df=4/345$ $p<.10$

() 内：SD 異なる英文字は，5%水準で（最小有意差法），互いに有意に異なることを示している。

Table 4
個別的満足度の平均値

	A大学 男子	A大学 女子	B大学 男子	C高校 男子	C高校 女子	分散分析の 結 果	
個 別 的 満 足 度	同性親友	3.17 (0.55) N=143	3.18 (0.72) N=34	3.11 (0.66) N=54	3.12 (0.67) N=55	3.18 (0.60) N=39	$F=0.18$ $df=4/320$ <i>n.s.</i>
	異性親友	2.95 b (0.84) N=77	3.08 b (0.67) N=13	2.40 a (0.99) N=29	2.72 ab (0.81) N=27	2.67 ab (0.62) N=15	$F=2.84$ $df=4/156$ $p<.05$
	父 親	2.90 (0.71) N=153	2.67 (0.85) N=58	2.93 (0.79) N=58	3.00 (0.84) N=52	3.05 (0.79) N=39	$F=1.36$ $df=4/330$ <i>n.s.</i>
母 親	3.05 (0.56) N=162	3.26 (0.75) N=34	3.17 (0.67) N=59	3.22 (0.71) N=55	3.18 (0.64) N=39	$F=1.43$ $df=4/344$ <i>n.s.</i>	
きょう だい	2.95 (0.69) N=156	3.07 (0.75) N=29	2.98 (0.88) N=56	3.15 (0.74) N=53	3.18 (0.63) N=34	$F=1.24$ $df=4/323$ <i>n.s.</i>	

() 内: SD 異なる英文字は、5%水準で(最小有意差法)、互いに有意に異なることを示している。

孤独感と信頼感および満足度との関係

① 孤独感と信頼感との関係： 孤独感と対人的信頼感および個別的信頼感との相関を Table 5 に示す。

対人的信頼感については、男子3サンプルでのみ高孤独者の対人的信頼感が低い有意な傾向あるいは傾向性が認められた。

個別的信頼感については、A大学一男子では教師・教官を除く5測度で、B大学一男子では教師・教官および父親を除く4測度で高孤独者の個別的信頼感が低い有意な傾向および傾向性が得られた。A大学一女子およびC高校一男子では同性親友についてのみ有意な負の相関(ただし、A大学一女子で傾向性)があったが、C高校一女子では孤独感と個別的信頼感との間には何の有意な関係もなかった。

② 孤独感と個別的満足度との関係： Table 6 に示すように、すべてのサンプルで同性親友については孤独感との間に有意な負の相関があった。また、B大学一男子では、父親、母親、およびきょうだいで有意な負の相関(ただし、父親は傾向性)、C高校一男子では異性親友で負の相関傾向性が得られた。

Table 5
孤独感と信頼感との関係 ——ピアソン相関——

	A大学 男子	A大学 女子	B大学 男子	C高校 男子	C高校 女子
对人的信頼感	-.182c (163)	-.231 (34)	-.213d (60)	-.222d (55)	.073 (39)
同性親友	-.368a (153)	-.336d (34)	-.401b (59)	-.425a (55)	-.118 (39)
個別 异性親友	-.201d (79)	.365 (14)	-.301d (33)	-.076 (30)	.383 (15)
父 親	-.145d (154)	.045 (33)	-.064 (58)	.108 (52)	-.159 (39)
母 親	-.219b (162)	.111 (34)	-.350b (59)	-.082 (55)	.020 (39)
信頼 きょうだい	-.165c (156)	.000 (29)	-.417a (56)	-.053 (53)	-.181 (34)
教師・教官	-.101 (163)	.054 (34)	.102 (59)	-.013 (55)	.039 (39)

() 内：有効ケース数

a : $p < .001$

b : $p < .01$

c : $p < .05$

d : $p < .10$

Table 6
孤独感と満足度との関係 ——ピアソン相関——

	A大学 男子	A大学 女子	B大学 男子	C高校 男子	C高校 女子
同性親友	-.376a (143)	-.534a (34)	-.485a (54)	-.354b (55)	-.522a (39)
個別 异性親友	-.063 (77)	-.219 (13)	-.245 (29)	-.328d (27)	.354 (15)
父 親	-.121 (153)	.056 (33)	-.250d (58)	-.026 (52)	-.199 (39)
母 親	-.099 (162)	.100 (34)	-.317c (59)	-.074 (55)	.064 (39)
満足 きょうだい	-.097 (156)	.025 (29)	-.362b (56)	-.091 (53)	-.216 (34)

() 内：有効ケース数

a : $p < .001$

b : $p < .01$

c : $p < .05$

d : $p < .10$

孤独感に対する、対人的信頼感、個別的信頼感、および個別的満足度の相対的規定度の検討

(1) 個別的満足度を除いた分析

孤独感に対する対人的信頼感および個別的信頼感の相対的規定度を検討するために、重回帰分析（変数増減法）を行った。

まず、異性親友—信頼感を除く5つの個別的信頼感と対人的信頼感とを説明変数として分析を行った。次に、これらの説明変数に異性親友—信頼感を加え

Table 7

孤独感に対する対人的信頼感および個別的信頼感の相対的規定度の検討

— 重回帰分析（変数増減法）の結果 —

従属変数：孤独感 説明変数：対人的信頼感 個別的信頼感（同性親友，父親，母親，きょうだい，教師・教官） 変数の追加・除外基準： $p < .10$			
	説明変数	標準偏回帰係数	R ²
A 大学 男子 N=140	同性親友—信頼感	-.363a	①.146
	母親—信頼感	-.152d	②.168
	$F=13.88,$ $df=2/137,$ $p < .001$		
A 大学 女子 N=28	同性親友—信頼感	-.373c	①.139
	$F=4.20,$ $df=1/26,$ $p < .05$		
B 大学 男子 N=52	きょうだい—信頼感	-.653a	①.209
	同性親友—信頼感	-.429a	②.382
	父親—信頼感	.337c	③.454
	$F=13.33,$ $df=3/48,$ $p < .001$		
C 高校 男子 N=50	同性親友—信頼感	-.425b	①.181
	$F=10.58,$ $df=1/48,$ $p < .01$		
C 高校 女子 N=39	基準を満たす説明変数なし		

○内の数字：変数の投入順

a : $p < .001$

b : $p < .01$

c : $p < .05$

d : $p < .10$

よび満足度を除いた分析とこれらを含めた分析を行った。後者の分析はN数を考慮して男子サンプルでのみ行った。これらの結果は Table 9 および Table 10に示す。

Table 9

孤独感に対する、対人的信頼感、個別的信頼感、および個別的満足度の相対的規定度の検討
 ——重回帰分析(変数増減法)の結果——

		説明変数	標準偏回帰係数	R ²
従属変数：孤独感				
説明変数：対人的信頼感				
個別的信頼感(同性親友, 父親, 母親, きょうだい, 教師・教官)				
個別的満足度(同性親友, 父親, 母親, きょうだい)				
変数の追加・除外基準： $p < .10$				

A大子 男子 N=131	同性親友—満足度 同性親友—信頼感		-.310a -.279a	①.153 ②.225
		F=18.56,	df=2/128,	p<.001
A大学 女子 N=28	同性親友—満足度		-.538b	①.290
		F=10.60,	df=1/26,	p<.01
B大学 男子 N=49	同性親友—満足度 きょうだい—信頼感 父親—信頼感 対人的信頼感 同性親友—信頼感 教官—信頼感		-.428a -.602a .306c -.235c -.228c .179d	①.226 ②.439 ③.500 ④.555 ⑤.587 ⑥.616
		F=11.22,	df=6/42,	p<.001
C高校 男子 N=50	同性親友—信頼感		-.425b	①.181
		F=10.58,	df=1/48,	p<.01
C高校 女子 N=34	同性親友—満足度		-.509d	①.259
		F=11.20,	df=1/32,	p<.01

○内の数字：変数の投入順

a : $p < .001$

b : $p < .01$

c : $p < .05$

d : $p < .10$

定因であった。異性親友を含めた分析では、きょうだい—信頼感および異性親友—満足度も孤独感の有意な規定因であった。ただし、きょうだい—信頼感の偏回帰係数の方向は正であった。

④ A大学—女子およびC高校—女子：女子2サンプルでは同性親友—満足度が孤独感の唯一有意な規定因であった。

考 察

孤独感と対人的信頼感

自己の対人的環境についてネガティブな態度や信念を形成している個人が孤独感を生じ易いという予測は、男子サンプルでのみ支持された。すなわち、男子でのみ対人的信頼感尺度と孤独感尺度との間に有意な負の相関があった。

大学生を調査対象とした Jones *et al.* (1981)の結果をみると、統制の所在尺度では男子のほうが、正当世界尺度および人性観尺度の信頼感下位尺度では女子のほうが、それぞれ孤独感との関係が強い傾向がうかがえる。したがって、孤独感と自己の対人的環境についての態度や信念との関係で見出された性差に関しては、対人的環境のどのような側面に焦点をあてた尺度であるかを考慮する必要がある。

本研究で、高校1年生、大学1年生ともに対人的信頼感と孤独感との関係について性差がみられたことは、信頼という点での人々に対する一般的期待である対人的信頼感が男子の生活の中で重要な役割を果たすことを示唆している。この傾向は、Jones *et al.* (1981)での人性観尺度の信頼感下位尺度の結果と逆である。

ところで、対人的信頼感尺度の α 係数が女子では少し低かった。女子では対人的信頼感という他者の行動についての一般的期待があまり結晶していないといえる。したがって、女子の場合、対人的信頼感自体が明確には形成されていないために孤独感との間に何の関係も生じないのかもしれない。

Rotter (1967) および Chun & Campbell (1974) は対人的信頼感得点には性差がみられないことを報告しているが、Kaplan (1973) は男子のほうが対人的信頼感が低いことを認めている。また、Wrightsman (1964) も人性観尺度での信頼感下位尺度において Kaplan (1973) と同じ傾向を得ている。本研究でも男子のほうが対人的信頼感が有意に低かった。しかし、個別の信頼感では、同性親友、異性親友、および教師・教官についてA大学2サンプルで信

信頼感が高かったが、性差は認められなかった。しかし、特定の他者に対する信頼感を測定する尺度の作成を試みた Johnson-Geroge & Swap (1982) は、a) 特定の他者に対する信頼感の因子構造は男女により異なる、b) 一般的に女子のほうが特定の他者に対する信頼感が高い、という結果を得ている。したがって、本研究で用いた1項目の個別的信頼感尺度では性差を検出するのに不十分であるかもしれない。いずれにせよ、信頼という点での他者に対する一般的期待が男子ではなぜ低いのか今後検討していく必要がある。

孤独感と個別的信頼感および満足度

孤独感と個別的信頼感および満足度との間の関係について相関分析は次の傾向を示した。

a) 孤独感と同性親友—満足度との関係はサンプルにかかわらず有意に負であった。

b) 孤独感と同性親友—信頼感との関係はC高校—女子を除く4サンプルで有意に負であった。

c) 異性親友については、大学生—男子2サンプルでは信頼感が、高校生—男子では満足度が孤独感と有意に負の関係があった。

d) 家族との関係については、A大学—男子では父親、母親、およびきょうだいに対する信頼感が孤独感と有意に負の関係にあり、B大学—男子では父親—信頼感を除く5測度で孤独感と有意に負の関係にあることが認められた。

このように、女子では、A大学—女子の同性親友—信頼感を除いて、孤独感と個別的信頼感との間に有意な関係は認められないのに、とくに大学生—男子では、さまざまな関係で、孤独感と個別的信頼感との結びつきが得られた。これは、信頼感が女子の生活の中ではあまり重要でないという先述の指摘を支持するものである。

重回帰分析の結果

孤独感の規定因を明確にするために、対人的信頼感、個別的信頼感、および個別的満足度を説明変数とする重回帰分析を行い、次の傾向が見出された。

男子では、3サンプルともに同性親友—信頼感が有意な規定因であった。大学2サンプルでは同性親友—満足度も有意な規定因であった。さらに、B大学サンプルでは、対人的信頼感、また、父親、きょうだい、および教官に対する個別的信頼感が有意な規定因として付け加えられる。この場合、父親および教官での偏回帰係数の方向は、権威者への不信が孤独感を低める可能性を示唆し

ている。彼らが青年期後期に入りつつあることを考慮すれば、これは興味深い傾向である。

女子では、大学生、高校生ともに同性親友一満足度のみが孤独感の有意な規定因であった。A大学一女子では満足度を除外した分析で同性親友一信頼感が有意な規定因として認められたが、満足度を含めた分析では同性親友一信頼感とは有意な規定因とは認められなかった。

ところで、対人的信頼感については、B大学一男子でのみ孤独感を直接規定する傾向が認められた。したがって、男子で認められた孤独感と対人的信頼感との結びつきは、ある程度、個別的関係の状態によって説明されると解される。

このように、男子とは対照的に女子では、対人的信頼感ばかりか個別的信頼感さえも孤独感とは関係なく、同性親友一満足度のみが孤独感の重要な規定因であるという知見は、女子の生活の中では信頼感が重要な役割を果たさないことを明確に示しているといえよう。

結論と今後の課題

本研究では、孤独感と信頼感との関係で明確な性差が見出された。すなわち、男子でのみ、a) 孤独感と対人的信頼感との間に有意な関係があり、b) 同性親友に対する信頼感が孤独感の有意な主規定因であった。しかも、a) およびb) の傾向は高校1年生と大学1年生とで共通して認められた。

このように、本研究の結果は、とくに男子の場合、同性親友に対する信頼感が孤独感に重要な関与をしていることを示している。したがって、親友に対する信頼感の形成要因を、今後、明確にすることは重要であろう。

例えば、Rotenberg & Pilipenko (1983-1984) は、幼稚園児、2年生、および4年生の男女児童を対象とした研究で次のような知見を得た。すなわち、a) 同輩に対する信頼感と自己に対する同輩の信頼感が一致する傾向 (mutuality) が2年生および4年生でのみ見出される、b) 時間的に一貫した行動を示すほど信頼される傾向が2年生および4年生でのみ顕著であり、幼稚園児では相手の行動の有益さ (helpfulness) が信頼感にとって重要である。さらに、Rotenberg & Pilipenko (1983-1984) も指摘するように、“四人のディレンマ”ゲーム研究においても、試行間で変化する協力反応を示す相手よりも一貫した協力反応を示す相手のほうが信頼しうると知覚され易いという傾向が得られている。

これらのことから、他者の一貫した行動が信頼感形成の重要な前提条件であ

るといえる。これは自己の対人的環境における予測可能性や統制可能性についての信念（正当世界尺度や統制の所在尺度）が孤独感に関与しているという先述した知見と対応している。

いずれにせよ、女子での孤独感に対する信頼感の関与が希薄である原因の検討を含め、信頼感形成の一般的機制を明らかにすることは孤独感研究にとって有意義であると考えられる。

<付 記>

- 1) 本研究の概要は、日本グループ・ダイナミックス学会第33回大会（1985年）において報告された。
- 2) 本研究は、筆者による一連の孤独感研究の一部であるが、名古屋大学文学部辻敏一郎教授のご指導に負うところが大きい。また調査実施の際には、名古屋大学文学部後藤倬男助教授のご協力を頂いた。いずれも明記して深く謝意を表します。
- 3) 本研究の統計的処理にあたっては、名古屋大学大型計算機センターの SPSS 統計パッケージ（7-9版）を利用した。

引 用 文 献

- Chun, K. T., & Campbell, J. B. 1974 Dimensionality of the Rotter Interpersonal Trust Scale. *Psychological Reports*, **35**, 1059-1070.
- Cutrona, C. E. 1982 Transition to college : Loneliness and the process of social adjustment. In Peplau, L. A., & Perlman, D. (Eds.) *Loneliness: A sourcebook of current theory, research, and therapy*. John, Wiley & Sons.
- Fey, W. 1955 Acceptance by others and its relation to acceptance of self and others : A reevaluation. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **50**, 274-276.
- Johnson-George, C., & Swap, W. C. 1982 Measurement of specific interpersonal trust : Construction and validation of a scale to assess trust in a specific other. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 1306-1317.
- Jones, W. H., Freemon, J. E., & Goswick, R. A. 1981 The persistence of loneliness : Self and other determinants. *Journal of Personality*, **49**,

27-48.

- Kaplan, R. M. 1973 Components of trust : Note on use of Rotter's scale. *Psychological Reports*, **33**, 13-14.
- 工藤 力・西川正之 1983 孤独感に関する研究 (I) ——孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討—— 実験社会心理学研究, **22**, 99-108.
- 諸井克英 1986 大学生の生活事態変化に伴う孤独感 実験社会心理学研究, **25**, 印刷中.
- Peplau, L. A., & Perlman, D. 1979 Blueprint for a social psychological theory of loneliness. In Cook, M., & Wilson, G. (Eds.) *Love and attraction*. Pergamon Press.
- Rotenberg, K. J., & Pilipenko, T. A. 1983-1984 Mutuality, temporal consistency, and helpfulness in children's trust in peers. *Social Cognition*, **2**, 235-255.
- Rotter, J. B. 1966 Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, **80**, 1-28.
- Rotter, J. B. 1967 A new scale for the measurement of interpersonal trust. *Journal of Personality*, **35**, 651-665.
- Rubin, Z., & Peplau, A. 1973 Belief in a just world and reactions to another's lot : A study of participants in the National Draft Lottery. *Journal of Social Issues*, **29**, 73-93.
- Russell, D., Peplau, L. A., & Cutrona, C. E. 1980 The revised UCLA Loneliness Scale : Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 472-480.
- Wrightsmann, L. S. 1964 Measurement of philosophies of human nature. *Psychological Reports*, **14**, 743-751.